受難節第４主日礼拝説教「あなたが光り輝くところで」予稿
日本基督教団石神井教会　2023年3月19日

【旧約聖書日課】出エジプト記　34章29～35節

29モーセがシナイ山を下ったとき、その手には二枚の掟の板があった。モーセ
は、山から下ったとき、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放って
いるのを知らなかった。30アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見ると、
なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかったが、31モー
セが呼びかけると、アロンと共同体の代表者は全員彼のもとに戻って来たので、
モーセは彼らに語った。32その後、イスラエルの人々が皆、近づいて来たので、
彼はシナイ山で主が彼に語られたことをことごとく彼らに命じた。33モーセはそ
れを語り終わったとき、自分の顔に覆いを掛けた。

34モーセは、主の御前に行って主と語るときはいつでも、出て来るまで覆いを
はずしていた。彼は出て来ると、命じられたことをイスラエルの人々に語った。
35イスラエルの人々がモーセの顔を見ると、モーセの顔の肌は光を放っていた。
モーセは、再び御前に行って主と語るまで顔に覆いを掛けた。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二　3章4～18節

4わたしたちは、キリストによってこのような確信を神の前で抱いています。5
もちろん、独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではあり
ません。わたしたちの資格は神から与えられたものです。6神はわたしたちに、
新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。
文字は殺しますが、霊は生かします。

7ところで、石に刻まれた文字に基づいて死に仕える務めさえ栄光を帯びて、
モーセの顔に輝いていたつかのまの栄光のために、イスラエルの子らが彼の顔を
見つめえないほどであったとすれば、8霊に仕える務めは、なおさら、栄光を帯
びているはずではありませんか。9人を罪に定める務めが栄光をまとっていたと
すれば、人を義とする務めは、なおさら、栄光に満ちあふれています。10そして、
かつて栄光を与えられたものも、この場合、はるかに優れた栄光のために、栄光
が失われています。11なぜなら、消え去るべきものが栄光を帯びていたのなら、
永続するものは、なおさら、栄光に包まれているはずだからです。

12このような希望を抱いているので、わたしたちは確信に満ちあふれてふるま
っており、13モーセが、消え去るべきものの最後をイスラエルの子らに見られま
いとして、自分の顔に覆いを掛けたようなことはしません。14しかし、彼らの考
えは鈍くなってしまいました。今日に至るまで、古い契約が読まれる際に、この
覆いは除かれずに掛かったままなのです。それはキリストにおいて取り除かれる
ものだからです。15このため、今日に至るまでモーセの書が読まれるときは、い
つでも彼らの心には覆いが掛かっています。16しかし、主の方に向き直れば、覆
いは取り去られます。17ここでいう主とは、“霊”のことですが、主の霊のおられ

るところに自由があります。18わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。

【福音書日課】ルカによる福音書　9章28～36節

28この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。29祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。30見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。31二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。32ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。33その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。34ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。35すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。36その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

日曜日の「山登り」【こども説教のために】

主イエスの「荒れ野の四十日」をおぼえて過ごす「受難節」の「祈りの四十日」を、折り返し地点まで歩んできました。この日、わたしたちは、福音書に招かれて、山の上の景色を見るようにされています。主イエスが弟子たち三人を伴って登られた山に、わたしたちも招かれているのです。

山の上で、主イエスのお姿は真っ白に輝いていらっしゃいます。二人の栄光に包まれた人、モーセとエリヤが、主イエスと語り合っています。この、光り輝く姿をお見せになりたくて、主イエスは、弟子たちを、そしてわたしたちを、この山の上へとお招きくださったのです。

日曜日から数えて「八日」目ごとに、つまり日曜日ごとに、わたしたちは、この山に招かれて来ています。この山に招かれているしるしとして、あの弟子たちは「教会」という仮小屋（＝幕屋）を地上に設けてきました。月曜日から土曜日までの日々を「山」ではないところで過ごしているすべての人が、日曜日に忘れずに、招かれた「山」へと登っていくことができるように。

この山の上で見たことを、弟子たちは当初、恐ろしく思い、沈黙を守っていました。それでもよいのです。弟子たちのように、幾度でも主イエスに連れられて山に登り直すことができます。わたしたちも、皆さんも。

「ここにいるのはすばらしいこと」

「受難節の四十日」の後半、わたしたちは、山を下って行きます。最後には、主イエスが十字架につけられた「受難週」の出来事へと進み入ります。あの「十字架」の立つ「丘」を見上げるところへと、導かれていくのです。

三年前の「受難節」に、わたしたちは、世界中の教会と共に「集まり」を閉じ始めていました。「受難週」には、「主のご復活を祝う復活祭（イースター)」は教会に集まらないように」と通知を出さざるを得なくなりました。それからほぼ三か月、「集まり」を閉じ、ようやく再開してからも、「集まり」は分散を余儀なくされてきました。ただ、このことを通して、わたしたちの教会は、子どもたちを皆さんのただ中に迎え入れていただくことになりました。子どもたちのための活動は、以前は完全に大人の活動から分離しているように思われていたのです。今、皆さんのただ中でその歩みを見守っていただいている子どもたちが、三年の間に少しずつ成長し、わたしたちと共に自分の人生を歩んでいくことを知り始めています。

わたしの青年時代、教会は、何よりも仲間と会い、人生の先輩の生き方を知る場所でした。多くの青年が通って来ている教会でしたが、わたしも含めて青年たちの中には、礼拝を睡眠不足を補う時間に充てていた者は少なくありませんでしたし、礼拝の終わりに歌う讃美歌、「頌栄」に間に合えば出席した気分になる「チチミコ信者」も少なくありませんでした。当時の牧師は、そのことで青年たちに苦言を呈するようなことは一切、言わなかったのです。今、そのようなことを勧めるわけではありませんが、わたしも、それでよいと思っています。日曜日の礼拝に、ここに集まって祈る者たちに、少しでも、かするだけでも、触れたいと思ってくださる人が一人でもあるならば、それは、どんなにすばらしいことでしょうか。

三人の弟子たちは、山の上で祈られる主イエスの姿を、傍らで見ていました。彼らは、ぼんやりとそこで過ごしていたのかもしれません。眠気が襲ってきました。居眠りしないように、じっとこらえていました。いいえ、すでに寝ぼけていたのかもしれません。そのような中で、主イエスのお姿が光り輝くのを見たのです。光り輝くモーセとエリヤの姿を、見たのです。

わたしたちも、見ているのです。日曜日の教会へと上ってきて、祈られる主イエスのお姿を。真っ白に光り輝く、そのお姿を。光り輝くモーセと共に、栄光に包まれたエリヤと共に。

その姿は、他でもない皆さんなのだと、今日、使徒パウロは「コリント」の教会の人々に語っているのです。もはや眠気と戦う必要のない皆さんは、モーセやエリヤのように、主イエスと共にいることで、自分の身に神の栄光を帯び、光り輝き始めている。目の覆いは、取り除かれているのです。

顔の輝きは山を下っても…

皆さんが主イエスと共にいることで与えられている光り輝きを、子どもたちに、青年たちに、すべての人たちに、余すところなくお見せいただきたいのです。「いいえ、自分は、信者と言っても未熟者だから、とても人様にお見せできるようなところはありません。ましてや、光り輝くところなど、少しも」などとおっしゃらないでいただきたいのです。あのモーセでさえ、民のために主の律法の記された「掟の板」を携えてシナイ山から下って来たとき、**自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった**、というのですから。

その光を放つ姿を見た人々が恐れて近づこうとしなかったために、モーセは、自分の顔に覆いを掛けざるを得ませんでした。けれども、皆さんが、主イエスと共にいるのに自分の姿を他の人に示そうとせず、覆いを掛けたような生き方、振る舞い方をしているとすれば、それは、皆さん自身の心に覆いが掛けられているということです。神との間に、主イエスとの間に、そして他の人との間に、心の覆いを掛けて、自分一人の世界に閉じこもろうとしている、ということです。そうパウロは言っているのです。

「**わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます**」。パウロの言うことは、何と大胆なことでしょう。そして、何とすばらしいことでしょう。あの、山の上で三人の弟子たちが見た主イエスの姿と同じ姿に、造りかえられ始めているのです。光を見た者は、その光を身に帯び始めているのです。どうして、それを隠しておかなければいけないと思うのでしょうか。

青年時代、礼拝でどんなに居眠りをしても、時間の許す限り、教会に入り浸っていました。仲間と言い争うこともありました。社会に出たら決して対等な関係にはならないような大先輩に盾突いたこともありました。元来、わたしは短気な性格なのです。それでも、教会に留まり続けました。仲間たちの中に、先輩たちの中に時折現れる「主イエスの光を帯びた姿」を、見ていたからです。その光を、自分も帯びる者になりたいと、ずっと思ってきました。その光によって、わたしの生き方は、定められてきたのです。

この光を、偽りの光で覆い隠してはいけません。仮初めの儚い輝きにすぎないものが、どれほど世に氾濫していることでしょう。山に上るとき、わたしたちは、そのようなものを麓に置いて、上るのです。山の上に、真の光があることを知っているからです。主イエスが弟子たちにお見せくださった輝かしい光を、わたしたちもその身に帯びる者だからです。

この光の輝きの中に、わたしたちは、互いを迎え入れました。老いも若きも、古い者も新しい者も、わたしたちは、十字架に至る道でこそ最も光り輝かれた主イエスの光の中に、今、招き入れられているのです。